

視点を変えて見る

愛知教育大学教授
寺本 潔

1 地図の視点

帝国書院『新編中学校社会科地図 初訂版』の25～26ページには、「東アジアと日本—大陸から日本を見わたす地図—」が掲載されている。この地図が狙っている視点は、文字通り「視点を変えてみる」大切さに気づく点である。人間は元来、自己中心的な見方にとらわれがちだ。「相手の立場に立つ」とか、「共感する」と言葉のうえでは簡単に用いるものの、実際の場面でその域に達することは容易ではない。しかも、領土や領海、ナショナリズムといった内容と絡む場合には、なおさらである。筆者の体験で恐縮であるが、こんなことがあった。アメリカのシカゴ市に仕事で訪ねたときである。市美術館前公園の敷石のタイル面に大きな世界地図（経緯線が入った詳しい地図ではない）が描かれているが、その中に日本海にうかぶ竹島もわずかにペイントされていた。「何か書いてあるな」と覗き込むと、漢字とハングル文字で「ここは韓国領である」とマジックで手書きされていたのである。観光客か誰かによる単なる落書きではあるが、後味の悪い釈然としない気持ちが残った。

こうした領土問題にいきなり入らなくても地図をいろいろな視点から眺めてみる機会を意図的に設ける指導は重要だ。先に紹介した「東アジアと日本」の図幅には、「大陸から見

る」視点が特色として掲載されている。普段なら九州あたりから大陸を眺める視点が北を上にする地図の約束事からいえば一般的なアングルであるが、視点をペキン（北京）の西にある石窟で有名な雲崗の上空に置き、日本列島（与那国島から択捉島や南樺太まで）がまるで大陸に傘をかけるような図取りで作成されている。「手前に中国や朝鮮が来て、向こうに日本が見える」という図取りである。「手前」とは自分の視点を意味し、地図読みの場合なぜだかその土地に住んでいる気持ちで眺める効果が生じるから不思議である。

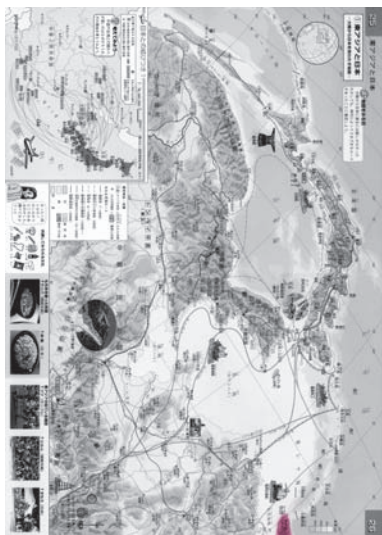
この図幅には、興味深い記入として「おもな交流ルート」が6つも印刷されている。たとえば、遣唐使が旅したルートを辿れば、シアン（長安）から様々な文物を日本に持ち帰った帰路が見えてくる。鑑真和上の渡海路では奄美大島、種子島、坊津と苦労しながら日本に渡った様子も想像できる。日本との間に位置する朝鮮半島や南西諸島がいかにか交流にとって重要な役割を果たしたのかが如実に分かってくる。さらに、海に視点を投じてみれば、黄海や東シナ海、瀬戸内海の水深が日本海や太平洋に比べて浅い（水深の凡例参照）ことが分かってくる。このことが、外洋に比べれば船の航海にとっては有利であり、いわば「交流の海」であったことも分かってくる。色分けされた交流ルートには遣唐使船や琉球交易船、鑑真和上の船もイラストで付けられ

ており、ルートに沿った「指旅行」も臨場感を持って体験できる。ただし、気をつけてほしい点は縮尺が曖昧であることである。一種のパノラマ地図のように描かれているため、図の端が伸びてしまい、たとえば北海道がやや小さく描かれている。反対にページの中央に位置している朝鮮半島や山東半島がめだっていて面積感が正しくない。この点は指導に当たって注意したいところである。

2 地図帳を回転させる

このページを見開いた状態で回転させてみよう。

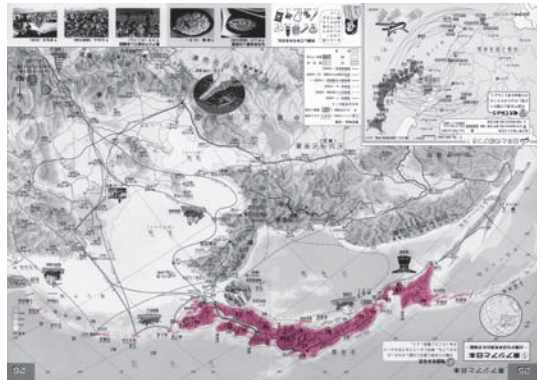
まず、台湾が手前（真下）にくるように回してみれば、東シナ海を挟んで沖縄島（琉球）と九州島、中国の長江周辺がクローズアップされてくる。琉球王国に残る「万国津梁の鐘」を教材に明との朝貢貿易が見えるアングルである。



「台湾を下に」

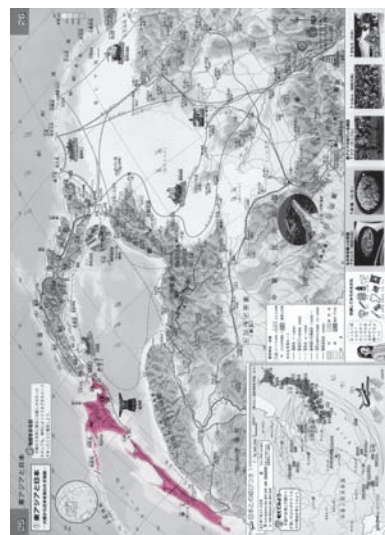
次に、日本列島が手前になるように回転させてみよう。そうすると普段生徒が見慣れている日本と中国との関係が見えてくる。中国

を手前にしているこのページの元のアングルと何が違うかを生徒に考えさせてみることで視点の転換が意味することが分かってくる。



「日本を下に」

最後に北海道や樺太が手前にくるように地図帳を回転させると、今度はアイヌの視点から東アジアが見えてくる。元が13世紀後半に樺太に軍を送ったことや青森県の十三湊がアイヌの人々との交易で繁栄したことなど、北日本とアジア大陸とのつながりが見えてくる。



「北海道や樺太が下に」

教科書との関連でいえば、とりわけ帝国書院版の『中学生の歴史 初訂版』の70～71ページには「琉球とアイヌがになう東アジアの交

易」というページがあるので「視点を変えてみる」学習にはもってこいである。学習形態として4人1組になり、地図帳のこのページを開いて1人ずつ該当のアンゲルを分担して調べ、中国・琉球・日本・アイヌの四つの視点から東アジアをとらえるようにうながす指導の工夫が望まれる。

地図帳を回転させることに合わせて、掛け地図もときには逆さまに掲示したり、いろいろな角度や方向から眺めたりしたい。フックを軸につけて紐で引っ張り角度を変えてみるのである。普段見慣れている上を北にした地図と異なり、「視点を変える」試みは学習効果が高い。

3 日本との結びつき

地図帳25ページ左下に、「日本との結びつき1」という主題図がある。これは日本と中国・台湾・韓国との直行便で結ばれる空港の地図である。日本の主要な都市との間でいかに多くのビジネス客や観光客が行き来しているかが、はっきりと分かる。自分たちが利用する空港の国際線時刻表をインターネットから探して調べてみれば何便出ているかが分かる。観光白書などから旅行者数も割り出せる。人の行き来が、同時に貿易の質や量にも反映する。生徒によってはこの図から、旅行に行ってみたいと感じる者も出てくるだろう。旅行代理店の店頭で入手した中国旅行パンフレットなどを複数配布し、旅気分を高めてはいかがであろうか。「上海4日間のグルメツアー」とか、「ソウルで愉しむエステ」、「古都シアンを訪ねる歴史旅」などの旅行企画が立案できる。

先に取り上げた「東アジアと日本」の図幅

に戻り、中世から近世にかけての日本との交易を想像させても面白い。あるいは、こういった交易の成果として26ページの下部に掲載されているもち米を使った料理や東アジアの似ている競技の5枚の写真を比較させてみるのも面白い。つまり、できる限りリアルに大陸との交流を扱うことがこの2ページの指導のコツなのである。

4 視点を変えて見る力

「視点を変えて見る」とは、言い換えれば多面的な思考ができるという力につながる。東シナ海で繰り返されている日中間に横たわるガス田開発の問題も、たとえば、次のような手順で論議する学習はどうだろうか。中国を地図の手前にした図幅を用いて中国側の視点で考える→日本を手前にした図幅を用いて日本側の視点と比較する→両国の視点の違いを鮮明にする→合意形成できる方法を考える→地図にその結果を示す。

こういった時事的な問題だけでなく、地理の貿易を扱う場面で日本企業の海外戦略を地図で考えたり、歴史の単元でどうして元が日本を襲ってきたのか、帝国主義の時代になぜ日本は満州や朝鮮、台湾、東南アジアに進出していったのか、などいろいろな視点で考えたりする素地を培うことができる。地図帳は場所に関する情報が盛り込まれているいわば社会科の辞典である。その辞典に掲載されている多数の視点は物事の背景を熟慮させる機会を生徒に与えるだろう。位置が醸し出す場所の意味、このことが「視点を変えて見る」ことの醍醐味なのである。

参考文献：寺本潔編『プロが教えるオモシロ地図授業』明治図書 2007

